

啓示と靈感

2025年9月28日

序：終末論：聖書が言う将来起こることの体系的学び

重要な内容 = 携挙、患難期、再臨、千年王国、御国

イスラエルを中心に展開

聖書の終末論を理解することの意義：世界が激動する中で、ゴールに向かって歩む
キリストにある希望を告白する
この世の価値観に左右されたり、同化されない

終末論は難しい、混乱している ⇒ 解釈学の混乱
すべての文書（聖書も含む）を解釈する
ルールを学ぶ学問

どの解釈学を採用するかによって、預言解釈の方向性が違ってくる

I. 4 パターンのアプローチ

(1) 聖書の預言は教会誕生～世の終わりまでの起こることの預言
黙示録も含め、教会の歴史を通して、継続して成就しつつある
将来成就する預言がいくつか残されている

(2) 黙示録も含め、終末の預言はすでに紀元1世紀に成就
ゆえに、キリストは王として御国を統治しておられる

(3) 黙示録も含め、聖書の預言は過去にも未来にも現実にも成就するものではない
なぜなら、信者の霊的体験を描写したものであるから
比喩的解釈の影響

○(4) 黙示録も含め、聖書の預言箇所は、基本的に将来成就する出来事の預言である
将来、キリストは再臨し、御国を建てられる

聖書が啓示する歴史の始まりは、天地創造

すべての物事の完成に向かっている

歴史の最終点、完結点は、キリストがあらゆる権威、権力、支配を打ち滅ぼし、
王国を御父に渡す時

コリント I 15・24

それから、終わりがきます。その時、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、
権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。

II. 神の啓示（聖書）と神の靈感（聖霊）

(1) 聖書は神のことばを含む（自由主義神学）

(2) 聖書は信じられる時に神のことばになる（新正統主義） カール・バルト

(3) 神は啓示を口述、記者たちがそのまま筆記した（口述説）

(4) 教理の部分の靈感は認める、他の部分の靈感は認めない（部分的靈感説）

(5) 記者が靈感を受けて記録（記者靈感説）

○(6) 聖書はすべて神の靈感による（聖書的靈感説）

息が吹き込まれている ∴ 誤りがない＝無謬
誤り得ない＝無誤

聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のため有益

聖書の正典は旧約（39巻）＋新約（27巻）＝66巻
神が権威を与え、西方教会が承認 A.D.397 カルタゴ教会会議

Ⅲ. 解釈学

(1) 誤った解釈学の源流

- 創世記 3・1～5 サタンの巧妙な欺き
- ① 神のことばを疑わせる
 - ② " 曖昧にした
 - ③ " の真逆にすりかえた
 - ④ の動機と目的を再定義した

(2) 神のことばを字義どおりに受け取り解釈した

- ① ノア、アブラハム、ヤコブ、ヨセフ、モーセら旧約の聖徒たちへの
神の預言は成就
- ② 332のメシア預言も字義どおり成就
- ③ ネブカデネザル王の夢の中の巨大な像の預言は実現

(3) 解釈学の逸脱と変遷

- ① ギリシャ哲学を採用、聖書の啓示と融合させた ⇒ 聖書の比喩的解釈
フィロン、ユスティノス 例：モーセの両手を支えた
- ② 聖書本文の三重の解釈 オリゲネス
字義どおりの解釈、道徳的解釈、比喩的解釈
キリストの再臨を比喩的に解釈（信者の個人的靈的体験）
- ③ 折衷的解釈 アウグスティヌス、教会教父たち
預言書は比喩的、その他は字義どおり
- ④ 宗教改革者たち
預言とイスラエルに関しては比喩的解釈 他は字義どおり
- ⑤ 近代の理性万能時代
超自然を排除、進化論支持、
新正統主義（聖書の無謬性・無誤性否定）
聖書には真理が含まれている
人間が応答する時、啓示となる
- ⑥ 20世紀後半～21世紀
普遍的絶対的権威や真理に懐疑的（相対的、解釈者による再構築）

まとめ

初代教会：字義どおりの解釈、千年期前再臨説
教会教父時代～宗教改革：預言書を比喩的に解釈
ジョゼフ・ミード（歿・1600）： " 字義どおりに解釈（初代教会と同じ）
19世紀～：聖書の靈感と権威への信仰、聖書研究盛ん、字義通りの解釈
千年期前再臨説復興

Ⅳ. 結び

(1) 終末論を学ぶ上で重要なことは聖書の靈感と権威を信頼すること

(2) 字義どおりの解釈をすること